

取組名：

中国帰国者福祉・交流プロジェクト

団体名：生き生き共生き（プロジェクト）

役職名：代表

氏名：潘 宏立

取組の目的、目指していること：

向島には中国帰国者等が多く居住しているが高齢化問題が深刻化し、一般住民等とのコミュニケーションが充分にとれないためにトラブル等が起きており、災害時の情報伝達にも問題がある。こうした課題に対応するために、中国帰国者と地域住民のネットワークをつくり、中国帰国者の福祉支援および地域住民との交流を行なう。

令和元年度の主な活動内容：

① 健康体操教室・認知症予防教室の実施

月2回金曜日に夕陽紅の会の会合と体操教室等を実施。毎回参加者約20名。毎回、楽しい雰囲気に参加者は元気に体を動かしていた。また、10月以降は、旧向島中学校跡地の地域交流拠点「むかちゅうセンター」の3階に「夕陽紅の会」が常設の交流室を開設し、中国帰国者がいつでも集まり一緒にダンスや体操ができるようになった。

② 日本の文化や慣習と中国の文化を学ぶ機会をととした地域住民との交流

7月3日(水)、京都文教大学で中国伝統芸能「南音」の鑑賞講座を実施。中国帰国者と地域住民が、大学生とともに中国から来日した演奏家と交流し、伝統的な楽器に触れ伝統音楽について学んだ。参加者28名。

京都文教大学の「地域でつながる日本語教室」(10月～3月：月2回土曜日)と連携、日本文化を学ぶ機会を提供。「地域でつながる日本語教室」には、フィリピン系の外国籍市民と留学生(中国人留学生を含む)が毎回平均7名程度参加。

春節祭を計画(2月9日)し、地域住民との交流会をする予定であったが、新型コロナウイルス流行のため中止せざるを得なかった。

令和元年度の主な活動内容：

2020年2月11日（祝）に中国帰国者と地域住民の交流ミニバスツアーを実施。京都舞鶴の引揚記念館、海軍記念館、舞鶴赤レンガ博物館を訪問し、第二次大戦前後の本土と中国の政治・社会状況や引き揚げ者およびロシア拘留者の苦労などについて一緒に説明を聞いたり食事や写真撮影をして親しく交流した。参加者18名。



京都文教大学の車を利用
舞鶴引揚記念館などを日本人住民と一緒に訪問し、交流を行った。

令和元年度の主な活動内容：

③ 日本語教室と中国語教室をとおした地域住民との交流

「地域でつながる日本語教室」(10月～3月：月2回土曜日)と連携して日本語を学ぶ機会を提供。中国帰国者もときどき参加して日本語を学んだ。

向島の地域住民が主催する「姫伝説探究会」で、12月～2月に月1回、中国人留学生が地域住民に中国語を教える「中国語教室」を実施。教師(留学生)2人、受講生5名が参加。

④ 中華料理(水餃子など)を地域住民と一緒に手作り、食文化の交流

10月26日(土)地域恒例の「向島まつり」のパート1として、「インターナショナルフェス」が実施され、中国や香港の留学生が京都文教大学の大学生と一緒に郷土料理を作って、地域住民に試食してもらい交流した。

⑤ 防災のための各人の避難計画の作成

夕陽紅の会のメンバーについては個人避難計画の策定は少しずつ進んでいる。2街区では防災訓練のお知らせの中国語版も掲示するようになり、中国帰国者も参加するようになった。

向島まちづくりビジョン推進会議の多文化共生ワーキングに参加し、非日本語母語者に向けた防災情報の発信や避難所での対応について話し合いをした。

活動において苦勞したこと、苦勞を乗り越えた対策など：

地域住民の交流イベント等活動への参加の輪がどうやって広がっていくか、大きな課題でした。一番大きな問題は言語問題であるが、中国帰国者はすでに高齢化しており、日本語学習への関心を失ってしまったし、交流活動への積極性が高くない。また、中国帰国者の二世、三世の参加が少ないことも課題である。これらの問題に対しての対策は、まず夕陽紅の会と連携し、その組織力を発揮してもらおう。もう一つは代表者が帰国者との信頼関係を生かせ、関係活動の意義を理解してもらい、各面において綿密な準備作業を行い、対応を行った。

令和元年度の活動の成果：

- ① 中国帰国者と地域住民がさまざまな交流活動やイベントを一緒にやることで、交流促進ができた。
- ② 特に旧向島中学校跡地の地域交流拠点「むかちゅうセンター」3階に夕陽紅の会が常設の交流室を開設し、毎日、5～10人の中国帰国者が集まって、体操やダンス、麻雀を一緒にやるようになったことで、中国帰国者の心身の健康福祉環境が向上した。
- ③ 本事業のメンバーに、中国帰国者団体「夕陽紅の会」の代表者と向島二の丸学区の民生委員さん、多文化交流を目的とする「にじいろプロジェクト」代表者に入っていたことで、中国帰国者を地域防災のネットワークにしっかり組み込むことができた成果がある。

今後の活動展望：

本事業名の「生き生き共生プロジェクト」で、多文化共生を目的とする交流団体を設立。今後は、今年度の実績を基盤として、明らかとなった課題に取り組み、中国帰国者だけではなく外国籍市民にも対象を広げた地域住民との交流と非日本語母語者の地域福祉の充実を推進する。具体的にはまず、今年度新型コロナウイルスの流行によって十分に実施できなかった以下の活動を行う計画である。

- ① 向島地域における「春節祭」の実施
- ② 地域住民、外国籍市民と連携した「認知症予防教室」の実施
- ③ むかちゅうセンターにおける地域住民向け中国語教室等、言語と文化を相互にまなぶ企画の実施。
- ④ 中国帰国者世帯の「わが家の避難計画」作成の推進
- ⑤ 中国留学生や非日本語母語者の2世や3世を巻き込んだ多世代交流の活動の推進

自由記載（ニュータウン・地域をこうしていきたいという思いなど）

昨年度は、「夕陽紅の会」と京都文教大学が京都市から委託された「地域でつながる日本語教室」と連携したことによって、予定していた活動のほとんどの支出をこれら2団体の予算から出してもらうことができたが、今後の活動経費を確保は大きな課題である。昨年度新型コロナウイルスの流行により延期や中止をしなくてはならなかった活動を、今年度実施するための予算を確保し、本事業を通してつながった中国帰国者と地域住民のネットワークを確たるものとしていくことが望まれる。